

1981年国際柑橘学会議を終えて

農林水産省果樹試験場興津支場長 西浦昌男

はじめに

昭和56年11月9日から12日まで、1981年国際柑橘学会議（1981 International Citrus Congress）が、日本学術会議・園芸学会・国際柑橘学会日本支部および財団法人日本植物調節剤研究協会の共同主催のもとに、東京の経団連会館において開催された。

日本学術会議会員の代表、共同主催団体の代表者、国公立の大学、試験研究機関の国際柑橘学会メンバーによって構成された組織委員会と、特に経理を担当して戴いた日本植物調節剤研究協会の絶大なご尽力によって、予定されたプログラムが滞りなく進行し、海外からの多数の参加者にも好評で、盛会の裡に終了したことは、この会議に関係したものとして大変喜ばしいことであり、深く感謝している。

わが国は、アメリカ・ブラジルに次ぐ世界第3位の柑橘の大生産国であるが、昭和47年以来の温州ミカンの生産過剰により価格が低迷し、柑橘産業は厳しい状況にあるので、この国際柑橘学会議の開催を受諾するか否かについて論議されたが、極力小規模に、そして質素にということで、柑橘関連業界のご理解も得られ、ご協力を戴いた。

なお、この国際柑橘学会議の一環として、11月13日に国際柑橘シンポジウムが農林水産省農林水産技術会議および果樹試験場の共同主催のもとに、同じく経団連会館で行なわれた。



図1. 1981年国際柑橘学会議のシンボルマーク

今後、国際的な会議やシンポジウムが、わが国で開催されることが益々多くなるだろうから、将来何かのお役に立てばと思い、「植調」誌のもとに应じて、シンポジウムも含め会議開催の経過と内容の概要を紹介し、その責を果たすことにしよう。

1. 国際柑橘学会の設立

1968年にアメリカ・カリフォルニア大学の創立100年を記念して、同大学リバーサイド校で国際柑橘シンポジウムが開催された。わが国からも数人が招かれ、このシンポジウムは成功裡に終わったが、このような国際的な会合を今後とも継続したいという気運が盛り上がり、1970年にイスラエルにおいて開かれた国際園芸学会の折、関係者によって国際柑橘学会（Inter -

national Society of Citriculture) が創設され、3～5年ごとに国際会議を開催することに決定した。

最初の国際柑橘学会議は、1973年にスペインにおいて開かれ、ついで1977年にはアメリカ・フロリダ州で、また、1978年にはオーストラリアにおいて臨時の会議が行なわれた。

国際柑橘学会は、現在60か国に約2,000名の会員を擁し、柑橘に関する基礎的分野から広く応用分野をも包含し、世界における柑橘学に関する最も包括的で権威ある学会である。わが国の会員は当初30名程度であったが、国際柑橘学会議開催時には527名に達した。わが国からは、国際柑橘学会の執行委員として、千野知長氏(前果樹試験場長・現財団法人日本植物調節剤研究協会会長)、大畑徳輔氏(前鹿児島大学農学部教授)、田中彰一氏(前玉川大学農学部教授・国際柑橘学会会長)が選出されており、今回の国際柑橘学会議の中心となってお活躍いただいた。

2. 日本開催についての経緯

1973年に最初の会議が開催された際、次回会議は日本で開催してほしいとの要請があった。しかし、当時はわが国の受入れ体制が整っていなかったため、時期尚早として辞退せざるを得なかった。次の1977年の会議においても、世界各国から次回開催について強い要請があった。関係者は園芸学会を始め、関連学会の協力を得て慎重に協議した結果、対応する国内学会として「国際柑橘学会日本支部」を結成して、会議開催に係わる諸事項について検討した。

その結果、この会議の開催には幾多の困難が予測されるが、各国の研究成果の交流を図ることにより、わが国柑橘学研究の進展はもとより、柑橘産業のもつ諸問題への対応についても大き

く寄与するばかりでなく、世界的視野で相互理解の促進が得られることを確信し、また、順当な当番国となるべき時機と信じて、日本開催を受諾することを1978年8月にオーストラリアで開かれた執行委員会に表明し、日本での開催が決定した。

過去の会議の開催状況は、第1表のとおりである。

第1表 会議の開催状況

回数：開催年	開催地	参加国：参加者
第1回：1973	スペイン、ムルシアおよびバレンシア	か国 人 26：700 (日本 10)
第2回：1977	アメリカ・フロリダ州、オーランド	39：1,100 (日本 29)
第3回：1978 (臨時)	オーストラリア、シドニー	12：200 (日本 9)

3. 会議の計画と運営

わが国での開催を決定するに先だって、本部には諸般の事情から小規模な会議としたい旨を申し入れ、了承を得ていた。しかし、参加希望者を断わる訳にもいかず、過去の会議の状況から察して、参加者をどれ位に見込むかが問題である。これは会場の選定のほか、予算面に直接ひびいてくる。

全体計画として、国外約300人、国内約150人、計450人、ほかに同伴者約80人を参加予定者と想定した。会議使用語は英語とし、国内参加者のために英日間同時通訳をつけることとした。研究発表は3日間とし、発表申込数を240前後と見込んで、発表時間を20分として5会場を準備した。また、従来の会議の慣行に従い、アブストラクトは会議前に作成して出席者に無料配布し、プロシーディングスは会議後印刷製本して会議出席者に無料で郵送することとした。

予算案をたてるにあたって、参加費の徴収は国際的な慣行もあって無暗に高くできず、不足分はご協力を仰ぐことになる。

この会議は日本学術会議が主催者に加わって頂き、国費が支出されて有難かった。これが決定されるまでには幾つかの手続きが必要である。まず開催年(昭和56年)の3年前(昭和53年)の12月に、日本学術会議へ共同主催希望の申請書を提出し、説明資料を作成提出する。翌年に入って日本学術会議の関係部で審議され、学協会から説明を行ない、パスすれば続いて国際会議主催等検討委員会で審議されるが、ここでも同様説明を行なう。そして、運営審議会において閣議請議候補が決定される。1981年国際柑橘学会議は、昭和54年3月末に候補に決定した。この後、開催前年度の準備期間の予算概算要求書の作成打ち合わせなど、各種の資料作成がある。そして、昭和55年9月5日の閣議において、日本学術会議が1981年国際柑橘学会議の共同主催者となることの閣議了解が得られ、ここに正式に決定した。

続いて共同主催についての合意書を作成し、組織委員会の発足、その運営要綱の作成、経費の分担を明確にした。これに先だって、日本学術会議内には国際柑橘学会議委員会(田中彰一委員長)が設置され、学協会側の準備委員会から引き継がれた運営委員会(千野知長委員長)と合して組織委員会が設立された。田中組織委員会委員長、千野副委員長のもとに、6部会(総務、プログラム、編集、会場・接待、登録、広報)が設けられた。双方から6名ずつの幹事が指名され、大体毎月1回の幹事会が招集されて、会議の準備にあたってきた。幹事の内から筆者が総務幹事に指名され、日本学術会議事務局との連絡にあたり、開催経費の予算書作成打ち合



写真1. 1981年国際柑橘学会議開会式

わせ、各種の資料の作成、実行予算案の作成などを行なった。組織委員のほか、多くの方々に専門委員を委嘱し、各部会の委員となって会議の準備、運営にあたって頂いた。

なお、日本学術会議と共同主催の際の経理は、日本学術振興会か関連のある公益法人でなければならない。結局、財団法人日本植物調節剤研究協会を煩わすことになり、運営委員会の中に経理委員会(委員長 田口宏総務部長)を設けて、参加費の徴収、協力金等の募集・管理などを引き受けて頂いた。また、協力委員会を設置して頂き、委員長には戸荻義次前日本植物調節剤研究協会会長が就任して下さった。シンポジウムを中心にした協賛会会長には後藤松太郎日園連会長を煩わした。柑橘界の厳しい状況のもとで、ご多忙の中を熱烈な応援を頂き感謝に堪えない。

4. 会議の日程

会議の日程の概要は、第2表のとおりである。11月9日正午から登録受付を行なったが、早く済ませて開会式までの時間を有効に使いたい参加者も多く、午前中に来た者もあって一時的に混雑した。それに当日の申込者が国外54名、国内47名もあり、変更手続きなどもあって手間取った。

第2表 会議日程表

月 日(曜)	午 前	午 後	夜
11月9日(月)		登 録 開会式	レセプション
10日(火)	一般講演	一般講演 執行委員会	各部長招待パ ーティー 執行委員夕食会
11日(水)	一般講演	一般講演	東京都知事レセ プション
12日(木)	一般講演	一般講演	サヨナラパ ーティー
13日(金)	国際柑橘シンポジウム		
14日(土)	静岡地方産地視察		

注：10日および11日午後にレディーズプログラム。

開会式は午後5時から始められ、筆者が進行係を勤めた。まず、田中組織委員長（国際柑橘学会会長）の歓迎の辞があり、続いて伏見日本学術会議会長、岩田園芸学会会長代理（東京大学農学部教授）の歓迎の辞のあと、国際柑橘学会の H. D. Chapman 博士（アメリカ・カリフォルニア大学名誉教授）の挨拶があり、来賓紹介に続いて梶浦実元園芸試験場長・園芸学会会長からのメッセージが披露された。

5. 参加国・参加者

国別参加者数、同伴者数は、第3表のとおりである。当初国外から約300人の参加者で同伴者約80人とみたが、予備調査で同伴者が増えそうなことがわかり、100人以上と考えていた。30か国から265人の参加で、同伴者は126人を数えた。国内も国際柑橘学会に多数加入頂き、当初の150人を大きく越えて241人に達した。

折角の機会であるので、東南アジア諸国から研究者を招待したいとの田中会長のご尽力で、トヨタ財団および日本万国博覧会記念協会から援助を得て、インド…2人、中国…3人、タイ

第3表 国別参加者数

国 名	参加者	同伴者
アルゼンチン	4人	3人
オーストラリア	29	19
ベルギー	1	
ブラジル	9	1
中国	11	
キューバ	6	
エクアドル	1	1
エジプト	2	
エチオピア	1	
フランス	4	2
ギリシャ	2	
インド	2	
インドネシア	1	
イラン	2	
イスラエル	32	15
イタリア	23	25
ケニア	1	
レバノン	1	1
メキシコ	8	2
オランダ	1	
ナイジェリア	1	
フィリピン	3	
南アフリカ	9	5
スペイン	35	12
タイ	1	
トルコ	1	1
英国	1	
ウルグアイ	1	
アメリカ	71	39
ベネズエラ	1	
国 外 計	265	126
日 本	241	3
合 計 (31か国)	506	129

…1人、インドネシア…1人、フィリピン…1人計8人の招待が実現した。

6. 研究発表

11月10日から12日までの3日間に研究発表が行なわれた。国別の各部会への研究発表申込数は第4表のとおりである。当初240題くらいかと思っていたが、予想を大きく上回って344題となった。日本76題、アメリカ69題についてキューバ41題、スペイン36題、イスラエル26題、

第4表 国別・各部会研究発表申込数

国 名	部 会							計
	1	2	3	4	5	6	7	
アルゼンチン	0	0	0	3	0	0	0	3
オーストラリア	1	2	6	1	1	3	1	15
ブラジル	7	0	0	2	0	0	1	10
中国	2	1	0	6	2	0	0	11
キューバ	8	5	7	4	4	10	3	41
エクアドル	0	0	1	0	0	0	0	1
エジプト	0	2	0	0	0	1	0	3
フランス	0	1	0	1	0	1	0	3
ギリシャ	0	0	0	0	1	1	0	2
インド	0	0	0	4	0	0	0	4
インドネシア	0	0	0	1	0	0	0	1
イスラエル	6	5	5	0	2	8	0	26
イタリー	7	4	4	5	2	0	1	23
メキシコ	3	2	0	1	1	0	1	8
モロッコ	1	0	0	0	0	0	0	1
ニュージーランド	0	0	0	0	0	0	1	1
ナイジェリア	0	0	0	0	0	1	0	1
パキスタン	0	0	0	0	0	1	0	1
フィリピン	0	0	0	1	0	0	0	1
南アフリカ	0	0	2	0	1	1	1	5
スペイン	4	14	7	6	0	5	0	36
タイ	0	0	0	1	0	0	0	1
アメリカ	11	5	9	12	9	14	9	69
ウルグアイ	0	0	0	1	0	0	0	1
国 外 計	50	41	41	49	23	46	18	268
日 本	12	9	16	7	12	8	12	76
合 計	62	50	57	56	35	54	30	344

イタリー23題などが多かった。

午前9時20分から午後5時30分すぎまで5会場をフルに使っても、口頭発表のみでこなすことはむずかしく、53題をポスター展示発表に変えた。20題ほどの取止めもあったが、申込数が増えたので、全部を20分間はとれず、部会によっては一部を15分間あるいは10分間に短縮せざるを得なかった。

研究発表は7部会に分ち、さらに各部会を5～10の分科にわけて行なわれた。各部会の分科別の申込課題数は、第5表のとおりである。遺伝・育種から利用・加工まで多方面にわたり、3会場では英日間同時通訳をいれて、連日熱心な討議が行なわれた。発表内容について、特に

第5表 各部会の分科別研究発表数

部 会 ・ 分 科 名	研究発表数
第1部会 遺伝・育種・繁殖	62 (12)
(1) 遺 伝	17 (7)
(2) 育 種	13 (1)
(3) 自然突然変異	7 (2)
(4) 培 養	5 (1)
(5) 台 木	20 (1)
第2部会 植物生理・生態	50 (9)
(1) 除草剤	8 (2)
(2) 環境要因に関連した水分問題	6 (1)
(3) 生産性に関連した水分問題	6 (1)
(4) 土壌管理	6 (0)
(5) 土壌に関連した肥料問題	5 (2)
(6) 生産性に関連した肥料問題	8 (2)
(7) チッ素肥料問題	5 (1)
(8) 栄養と水問題	6 (0)
第3部会 栽培技術	57 (16)
(1) 栽植密度と剪定	9 (2)
(2) 栽培管理・生理病	9 (2)
(3) 生長調節物質と果実品質	8 (2)
(4) 着花の調節	4 (1)
(5) 結実と摘果	8 (4)
(6) 収 穫	7 (0)
(7) 大気汚染	4 (3)
(8) 環境の影響	8 (2)
第4部会 病 害	56 (7)
(1) 糸状菌病(黄はん病, そうか病, 黒点病, 黒星病, 疫病, マルセコ病など)	13 (3)
(2) 細菌病(かいよう病)	11 (2)
(3) センチュウ	4 (0)
(4) トリステザウイルス	5 (1)
(5) その他のウイルス, ウイロイド病	6 (1)
(6) スタボーン病	2 (0)
(7) グリーニング病	8 (0)
(8) シトラスブライトまたは類似症状	7 (0)
第5部会 虫 害	35 (12)
(1) マシン油乳剤の利用	4 (1)
(2) 総合防除	12 (3)
(3) 生態と発生予察	
Ⅰ ダニ類	5 (3)
Ⅱ その他の害虫	6 (3)
(4) 薬剤防除と薬剤抵抗性	
Ⅰ 殺ダニ剤	4 (2)
Ⅱ その他の殺虫剤	4 (0)
第6部会 流通・貯蔵	54 (8)
(1) フィルム包装	6 (0)
(2) 貯蔵と品質保持	8 (0)

第5表(つづき)

部 会 ・ 分 科 会	研究発表数
(3) カラリングと貯蔵	7 (2)
(4) 貯蔵障害	6 (2)
(5) 保存剤に対する抵抗性	4 (0)
(6) 腐敗と腐敗防止	5 (0)
(7) 新保存剤の開発	7 (1)
(8) 選果施設と取扱い	5 (2)
(9) 輸送と流通	6 (1)
第7部会 利用・加工	30 (12)
(1) 柑橘の加工	6 (2)
(2) 生 化 学	6 (3)
(3) 副 産 物	5 (2)
(4) 苦味および香気成分	7 (2)
(5) ペクチンその他	6 (3)

注：研究発表数の()内は日本の発表数。

読者に関係の深い部会のものは記すべきであるが、残念ながら筆者は会期中殆んど事務局に釘付けで、全く聞くことができなかった。すでにアブストラクトがでていし、各部会の要約は「果実日本」昭和57年2月および3月号にも紹介されているので参照されたく、さらに詳細を急ぎご希望の方は、各部会のChairmanにお問い合わせ願いたい。

7. 社 交 行 事

11月9日午後6時から開会式に引き続いて経団連会館内でレセプションが開かれた。日本の歌曲の独唱に続いて、戸荻会長・後藤会長の歓迎の辞があり、川嶋農林水産技術会議事務局長

の乾杯で始められた。全員出席して盛会であったが、会場が思っていたより狭く、かなり窮屈だった。

11月10日は執行委員会終了後、夕方より築地の治作で執行委員20人の招宴が開かれ、日本料亭での一夜が喜ばれた。また、各部会長による重要メンバーの招待が、都内各所で開かれた。

11月11日には、東京都知事のレセプションが、パレスホテルで午後6時30分頃から開かれた。海外からの参加者が招待され、一部日本側の役員が加わった。知事が渡米中のため、三木副知事の歓迎の辞があり、招待者を代表してChapman博士の挨拶があった。盛会で、ミス東京が花を添えた。

11月12日夕方から椿山荘において“さよならパーティー”が開かれた。会費の持寄りで行なったが、多数の参加者で、各国の歌の交換などもあり、なごやかなふんいきであった。その席上、国際柑橘学会創立以来、学会の運営に顕著な功績のあったH. D. Chapman博士に名誉会員の称号が贈られた。

レイディーズプログラムは、11月10日と11日の午後に行なわれた。1日目は主としてショッピング、2日目は国立博物館見学の後、日本女子大で茶の湯と生け花の公開実演で、いずれも多数の参加があり、好評であった。



写真2. 田中会長とチャプマン博士



写真3. 国際柑橘学会新会長ジャコメッティ博士(ブラジル)

8. 国際柑橘学会執行委員会

11月10日午後に関われた国際柑橘学会執行委員会において、次期会長にブラジルの D. C. Giacometti 博士が選ばれ、次回国際柑橘学会議は1984年にブラジルで開催されることに決定した。また、懸案の規約について協議が行なわれ決定した。

9. 国際柑橘シンポジウム

11月13日には農林水産省農林水産技術会議および果樹試験場の共同主催による“World Citrus Industry”と題するシンポジウムが経団連会館で開催され、川嶋農林水産技術会議事務局長より開会の挨拶があった。北米（アメリカ・カリフォルニアおよびフロリダ州）、南半球（ブラジル、アルゼンチン、南アフリカ）、地中海地域（イスラエル、イタリア、スペイン）、アジア（中国、インド、日本）の4地域に区分して、各国代表からそれぞれの国の柑橘産業の現状と将来について報告があり、討議が行なわれて有益であった。なお、インド代表が来日できなかったため、最後にFAO代表の報告が加えられた。

国際柑橘学会日本支部は“The Citrus Industry in Japan”（農林水産省果樹試験場興津支場 小崎格編）を印刷発行し、国際柑橘学会議またはシンポジウムに出席の全員に配布した。

10. 産地視察

11月14日朝、新幹線こだまで東京をたち、静岡岡地方への日帰り視察旅行が行なわれ、国外からの276人が参加した。バス7台を連ね、日本平に登ってから静岡県柑橘試験場を見学し、同場で昼食の後に清水市農業協同組合庵原支所選

果場を見学し、東名高速道路を西に下って三ヶ日町に行き、同町農業協同組合施設ならびに付近産地を見学し、豊橋駅で解散した。好天気に恵まれ、新幹線・バスとも快適な旅で、好評であった。解散後、東京に引き返すもの、続いてポストコングレスツアーに出かけるものに分れた。

11. Post Congress Tour

京都から和歌山・広島、京都から愛媛・広島、それに蒲郡から京都・長崎・口之津の3コースの見学旅行が企画され、いずれも5泊6日で東京に帰るのであるが、それぞれに102人、54人、18人が参加し、柑橘栽培の現状を具に見学して帰国した。

12. Proceedingsの出版

当会議発表のアブストラクトは、印刷して会議当日に配布した。発表の全文はシンポジウムも含め1981 Proceedings of the International Society of Citricultureとして出版される。2分冊の予定で、すでに印刷会社で仕事を進めており、順調に進めば今年末ないし新年早々にはできあがる見込みである。

おわりに

わが国の柑橘産業の苦難期に開催された国際会議であり、会議の準備段階から極力自分達の手で行なって経費の節約に努めてきた。また、柑橘関係の研究者は、大学・試験場とも西日本に多く、遠く離れている。しかも各人本務をもっているため、多忙を極めたことは確かであり、この会議のSecretary Generalとして長期間に亘るご協力に対して、改めて厚く御礼申上げる次第である。